今日を愉しむウィーン気質

―ヨハン・シュトラウスⅡ世「こうもり」を観るー

鎌　田　道　生

「美しき青きドナウ」

オーストリア・エアラインがウィーン空港に着陸の姿勢に入る。機内にワルツ「美しき青きドナウ」の旋律が流れ、眼下にドナウ河の湿原地帯が広がり、飛行機は軽やかに踊り舞うごとく地表に下りる。なんと洒落たお国入りの儀式だろう。

「美しき青きドナウ」の原語は「An der schönen blauen Donau」（美しく青きドナウ河に沿って）である。第二の国歌と言われるこの歌には少々複雑な歴史的背景がある。かつては現在のオーストリア共和国の総面積の数十倍もの領土を誇った旧ハプスブルク帝国はナポレオンの登場以降、領地を次第に失い、対プロイセンとの戦いに敗れた直後の1867年にはオーストリア＝ハンガリー二重帝国に名称を変える。ドナウ河はドイツの「黒森」に源を発しオーストリアに入り、ハンガリー王国、またバルカン諸国をくねり流れルーマニアにおいて黒海に注ぐ。領地が狭小になったとはいえ、当時「ドナウ帝国」と呼ばれたこの領域は、現在のチェコの全域、ポーランドやロシアの一部をも組み込んだ多民族、多言語、多宗教の国家であった。住民たちには往時のマリア•テレジア女帝の帝国首都の矜恃が記憶に色濃く残っていたに違いない。

こうした背景のもと「美しき青きドナウ」（1867年）はワルツ王ヨハ

ン・シュトラウス2世（Johann Strauß 1825－1899年）が「ドナウ帝国」の民衆を励ますために作曲したものだった。一方勢いに乗るプロイセンは1870年から翌年に掛けてナポレオン3世のフランスとの戦争にも勝利を収めドイツ統一を成し遂げる。ウィーンは1873年にはパリやロンドンに次いで第3回万国博覧会を開催し世界都市の偉容を誇示しようとしたものの、その直後、大恐慌に見舞われ多くの銀行が経営破綻し、金融機関に多大の自殺者が出る。やがて二重帝国はチェコをはじめバルカン地域の民族独立運動などをはじめ一触即発のカオスを抱えたまま、没落と頽廃の気配漲る爛熟した世紀末文化の開花を迎える。

オペレッタ「こうもり」(Die Fledermaus)

シュトラウスの「こうもり」（初演1874年）の登場は、暗い世相を笑いによって吹き飛ばそうとする意図に基づいていたに違いない。ところで現代のウィーンでは大晦日の「こうもり」の上演は年頭のニューイヤーコンサートとならび人気の出し物となっている。しかし当時シュトラウスの世間的評価は、民衆の中での「ワルツ王」としての人気に比して宮廷や貴族たちの集う社会ではそう高かったとは言えない。音楽の都では19世紀を通して楽聖と呼ばれたベートヴェンの流れを汲む正統派音楽やヴァーグナーやブルックナーなどの世紀末音楽の隆盛の影に隠れて彼の音楽は単なる娯楽の音楽として軽視されていた。事実シュトラウスの喜歌劇が旧市街の国立歌劇場に登場するのは1920年代を待たねばならない。

しかし時代は世紀末へ向かい、力を増した新興市民階級や労働者が自らの愉しみを軽快な音楽に求める。当時パリ市民の人気を集めていたヴォードヴィルや、オッフェンバックの喜歌劇「天国と地獄」、「ホフマン物語」がウィーンにも入り、盛名を馳せていたオーストリア系のズッペの「軽騎兵」、「ボッカチオ」や「詩人と農夫」と競った。民衆はこれらに匹敵する軽喜劇、憂さを晴らし現在を愉しむオペレッタをワルツ王に要求したので

ある。そこでシュトラウスはオッフェンバックとの交流もあってオペレッタを創作しようと決断する。1871年に「インディゴと40人の盗賊」、73年に「ローマの謝肉祭」が作曲されるがこれらは今日余り上演されない。「こうもり」は喜歌劇（Operette）の第三作目である。台本作者の二人 C.ハフナーと R.ジュネは1872年にパリで初演されたヴォードヴィル『レヴェイヨン Le Réveillon（大晦日の晩餐会）』を下敷きにしているが、実はこのヴォードヴィルは1851年にベルリンで初演された R.ベネディクスの喜劇『監獄 Das Gefängnis 』を元にしている。つまりドイツの喜歌劇がパリを経て里帰りしたのであった。

初演こそ惨めな失敗に終わったものの、世紀末の不安な時代を生きる庶民の欲望と、逸楽を貪る上流社会への庶民の批判を、民衆の中から生まれたワルツの旋律を主として用い、鋭い風刺と変幻自在の色彩感豊かなメロディーとによって表現した作品は、滅びゆくハプスブルク帝国への賛歌と挽歌の入り交じった喜歌劇の傑作となった。

この小論ではオペレッタ「こうもり」の場の進行に即しながら幾つかの歌曲を取り上げウィーン気質の内容を検討してみたい。

第１幕：「どうにもならぬことは　忘れること　それが幸せさ」

序曲が三和音の連打で始まり、軽やかで切れ味鋭い旋律の鳴り響く中、幕が開く。時代はシュトラウスの生きた時代、舞台はウィーン郊外の金利生活者、貴族アイゼンシュタインの館。役人を侮辱したかどで8日間の拘留が決まっているアイゼンシュタインは、やって来た友人ファルケ博士の甘言にのって刑務所に入る前にロシア人の大富豪の館で開かれるパーティに出掛けることにする。一方、その妻ロザリンデは小間使いアデーレの休暇願いを叶えてやり、訪ねて来た愛人アルフレートと濃密な逢い引きを愉しんでいる。そこに刑務所長フランクがアイゼンシュタインを収監するた

めに出現。困ったロザリンデはアルフレートをアイゼンシュタインと偽り拉致させる。後に分かることだがすべては公証人ファルケ博士が仕組んだ芝居である。登場人物の性格も見事に描き分けられ、またそれぞれの場景にふさわしい旋律が当てられる。

このオペレッテの筋は予期せぬ出来事が連鎖し、それに臨機に対応し登場人物が他人になりすましたり、互いに騙し合いつつ芝居を続けながら進行する。そこには階級社会（貴族・市民・下層民）の現実を生きる人たちの小さく制限された自由が反映され、その中で瞬間を愉しむ刹那的なウィーン風生き方が展開され、風刺される。まずは第1幕から2曲を選んで紹介したい。

第３曲：パーティー

この二重奏の始めの部分、ファルケがアイゼンシュタインを巧みにパーティーへ誘う箇所を引用してみよう。

パーティーは歌劇では、ヴェルディ、プッチーニ、チャイコフスキーを引き合いに出すまでもなく、登場人物の人生の交錯の場、世相を映す鏡として使用される。この第１場ではフロイトの言うリビドー（Libido ）、男たちを翻弄する欲動が主役となる。いやリビドーが男女の行動の根底に蠢いていると言った方が正しいかも知れない。

さあ行こう　パーティーへ
すぐそこだぜ！

そうさ　若返ること　違いなし！
若返ることさ！

静かな独房で
二日酔いに苦しむより
君は人生を愉しんで
陽気に過ごさなくちゃ！

目も眩む大広間に
優美な楽の音
麗しの魔女たちとの
さながら　神々の饗宴さ

ポルカが愉快に鳴り響き　　快楽と戯れのうちに
軽やかに舞い立つ　　時は飛ぶように流れ
眩しい衣装の踊り子たちが　　あらゆる苦しみから離れ
バラの鎖できみを虜にするぞ　　心はすこやかになるぜ
（右上へ続く）

ファルケの巧妙な唆しにもともと好色なアイゼンシュタイン（Eisenstein=鉄石、さしずめ金銭と女性に弱い石部金吉！）は気取りながらも抑えがたい欲望に耐えきれず、脚がむずむず自然にワルツのステップを踏み、遂にはふたり一緒に肩を組み踊り出す。ワルツが欲望をそそり二人はパーティー目指し飛ぶように退出する。

またロザリンデも人目を憚りながらも恋人との逢瀬に今にも陥落寸前、つまり彼女もまたリビドーの虜、いかにも爛熟した二組のエロスの演技が重なり合う。瞬間を楽しむブルジョアたちの生態をシュトラウスの手練手管に富む楽音が活写する。

次いで第5曲フィナーレ「酒の歌」、クプレの三重唱の場、アルフレートがロザリンデを見詰めながら歌うくだりを見てみよう。

第５曲：飲んで歌って忘れて

飲もうよ　飲もう　さあ飲もう！　　どうにもならぬことは
飲めば　明るく見えてくる　　忘れること　それが幸せさ
美しい両目が澄み切れば　　どうにもならぬことは
すべてがはっきり分かるのさ　　忘れること　それが幸せさ

熱い愛とか言ったって　　乾杯　乾杯　歌い　歌い　歌って
つまりは　むなしい幻想さ　　ぼくと一緒に　飲んで　歌って
永遠の操もシャボン玉さ　　ラララ　歌い　歌い　歌って

そんなものどこにもありゃしない！ ぼくと一緒に　飲んで
心を嬉しがらせる幻が　　歌い　歌い　歌って！
たとえ失せてしまっても
ワインがすべてを忘れさせ
きみをやさしく慰めてくれるさ！

この後、「どうにもならぬことは　忘れること　それが幸せさ」(Glücklich ist, wer vergißt, was doch nicht zu ändern ist)という詩句が、あたかもこれから開かれる宴会のライト・モティーフのように執拗に繰り返され三重唱へと移る。この第５曲、全員がパーティーへ赴く気分になって踊り出す場面は、シュトラウスの面目躍如たるもの、音楽の優美さ、軽やか、輝かしい拍子は、ドイツの音楽の厳粛な音色や形式、バッハ、ベートーヴェンやブラームスなどの堅牢な構成を見せる古典派音楽とはおよそ対蹠的なもの。また正統派音楽を継承した20世紀前半の作曲家、リヒャルト・シュトラウスの『薔薇の騎士』（Der Rosenkavalier 1909年）の重厚で優美な深さを湛えたエロスの表現と比べてみればワルツ王の音楽の軽快さが理解されよう。何度も繰り返される科白、「どうにもならぬことは　忘れること　それが幸せさ」はウィーンの人々の世紀末の気分を顕す代表的表現になった。ホラティウスの「現在を愉しめ」(carpe diem)のウィーン的言い換えだろうか。恋に酔いワインに酔ったアルフーレトはアイゼンシュタインの身代わりに監獄に連行され、慌ただしい喧噪の中に幕となる。

第２幕　なりすまし一人生は劇場。

第2幕の舞台はロシアの貴族オルロフスキー公爵の屋敷。間奏曲と合唱が始まると仮面舞踏会が今や宴たけなわ。アデーレは女優に、ロザリンデはハンガリーの伯爵夫人に、アイゼンシュタインはフランスから来たル

ナール公爵（renard はフランス語では狐）に、フランク所長は同じくフランス人のシャグラン公爵（chagrin は苦しみ）になりすます。舞台を提供するオルロフスキーは富裕な生活に退屈を覚え何事にも興味を覚えぬニヒリスト、いやニヒリストなどと言う表現はおこがましい。世紀末のニーチェの哲学が登場する以前の時代である。むしろ政治にも文化にも無縁の権力者、暴君で金満家の公爵に過ぎない。彼は自分を笑わせる人、楽しませる事件を求めて宴会を催し厭世観から逃れようとするのである。それに乗じてファルケ博士が、変身願望に満ちた登場人物たちを動員してオルロフスキーを笑わせようとする。さながら中世の物語に登場するアルルカンの役をファルケが演じる。まずはオルロフスキーの台詞を見てみよう。曲はクプレ形式を取る。

第 7 曲：無礼講

私はお客を招くのが好き
ここでは優雅に過ごし
思いのままにお愉しみあれ
ときには夜が明けるまで！

私の宴会で客たちが
退屈するのを見つけたら
すぐさまそいつをとっ捕まえ
ドアから外に放り出す

客たちが何をしようと話そうと
私はいつも退屈してばかり
だが退屈していいのは主人の私だけ
お客が飽きるのは許せない
（右上へ続く）

どうしてそんなことするのと
お尋ねならば答えよう
私のところじゃ　こうなのさ
「みんなそれぞれ好きにして!」

「みんなそれぞれ好きにして」(Chacun à son gout)という言葉は、「蓼喰う虫も好き好き」という表現に当たる。こうして無礼講の仮面劇が展開される。それぞれの振る舞いによって各人の願望が露わになる。もう一つの

曲、ロザリンデの絶唱を紹介したい。ハンガリーの貴婦人に扮したロザリンデが素性を怪しむアイゼンシュタイン（ルナール侯爵)、自分に言い寄る夫を騙すためチャールダッシュの旋律で故郷を歌う場面である。ハプスブルク帝国にあってはハンガリーの風土は独自のアジアの文化をウィーンの地に送り込む。今もなお続く民族音楽の宝庫、豊かな平原、食物、その大自然はその地に君臨する貴族階級に異国の文化を与え続けた。同じシュトラウスの『ジプシー男爵』（Der Zigeunerbaron）が如実に表現している世界である。ロザリンデの歌に感動したアイゼンシュタインはその色香に惑い情事の小道具である金時計を巻き上げられてしまう。これが浮気の証拠となり、第3幕での夫婦対決の場を作り出す。アリアは四分の二拍子の愁いを含んだ歌唱から始まり、ハンガリーの風景を歌う熱情が朗々と歌い上げられる。

第10曲　懐かしきプスタ、ハンガリーの大地

故郷の調べが　憧れを呼び起こし
私の目には　涙が浮かぶ
ああおまえたち　故郷の歌を聴くと
私の心はおまえに　わがハンガリーに
引き寄せられる！
おお　すばらしい故郷
太陽は　なんと明るく輝き
森は　緑に満ち
草原は　微笑み
おお　私が幸せだったあの国！

そう　おまえのいとしい姿は
私の心を　くまなく満たす
おまえのいとしい姿！
たとえ私がおまえから
遠く　どんなに遠く
離れていても
私の心は　とこしえに
ひたすら　おまえもの！

またこの場ではフランス貴族になりすましたアイゼンシュタインとフラ

ンクがフランス語会話をたどたどしく交わしながら女性たちの気を引こうとする寸劇があり、ドイツ人のフランス文化に対するコンプレックスを笑いに変える一幕も見られ、また飛び交う会話も羽目を外し観客の笑いを誘う。ここは演出によって随意なアドリブの行き交う箇所である。こうした雰囲気にさすがのオルロフスキーも憂さを払われ、遂にはシャンペンを讃える歌を声たかだかに熱唱する。次いでファルケがフランス革命の精神をもじった「親しい仲間よ、一緒になって兄弟、姉妹の間柄になろうよ」と熱唱する。シュトラウスの音楽は世間に漲る狭小な倫理観を笑い飛ばすように、灼熱した噴火流さながら強靱な熱気で宴会を襲い、一同はシャンペンを讃え、皇帝を褒め、「ああ　なんと素晴らしい祝宴！なんと喜びあふれた夜会！愛とワインが私たちを祝福してくれる！」と叫び、「毎日が今日のように陽気に過ぎてゆくのなら、人生はいつも楽しさに満ちているだろうに」と締めくくる。この台詞は有り得ない事態を想定する仮定法第二式で歌われている。束の間の宴会はいつ砕け散るとも知れぬ見果てぬ夢の空間、変身願望の劇場なのである。

第 3 幕：大団円

宮仕えは辛きもの

幕が上がると舞台は一転して監獄の刑務所長の部屋となる。酔っ払った看守が登場する。この役はウィーンではブルク劇場の名優が演ずるのが慣例である。公務員の身分、宮仕えの辛さをスリボヴィッツ（スモモから醸造された火酒）で紛らわす看守が登場する。彼は酔っ払った演技ともども笑いを誘いながら壁に鎮座するフランツ・ヨゼフ皇帝にも訴える。名場面であり、所長室の壁に掛けられた肖像、忠実な二重帝国の皇帝の謹厳実直な表情が可笑しさを増幅させる。そこへ登場する所長フランクも昨晩の宴の名残か溺酔しており、両者の掛け合いはさながら西洋風漫才である。

この場面はアドリブが随意に挟まれる。筆者がウィーンのフォルクスオペラで観た時は、愛すべき皇帝への揶揄と愛情を交えた演出になっていたし、また同時に、自分たちを打ち負かしたプロイセンの首都であるベルリンを揶揄する台詞が顔を覗かせた。因みにアイゼンシュタイン(Eisenstein)はプロイセン宰相のビスマルクを指すとの指摘もあるが、彼が最後には笑いものにされるゆえに、それもあながち間違っているとは言えない。またベルリンの喜歌劇場(Komische Oper)での演出では、この場はウィーン文化への揶揄が見て取れる演出になっていた。演出の匙加減一つで風刺の対象が逆転する面白さである。バイロイト音楽祭のヴァーグナの楽劇の演出を引き合いに出すまでもなく、またローベルト・ムージル『特性の無い男』(Der Mann ohne Eigenschaften 1930－42年)に展開される巨大な構図、大国カカーニエンと北の軍事強国プロイセンの平行関係まで持ち出すまでもなく、異文化の相克が演出を盛り上げ観客を魅了するのは観劇の醍醐味であろう。

看守と所長の掛け合いの場に続いて、パーティから帰って来たアデーレたちが登場、自分の身分を明かし女優になりたいと、酩酊したフランクに向かって科を作りながら扇情的に演技する。好色小父さんはイチコロである。まずアデーレの歌を紹介しよう。彼女は田舎娘から女王に至るまで、多様な人物に変身しながら所長に演技を売り込む。アデーレ役の見せ場である。

機知に富んだ弾む旋律が若い女性の演技を盛り上げる。まずは田舎娘になった想定の歌である。

第14曲：アデーレの願望

第14曲は再びクプレの形式を用いる。アデーレ(Adele)は「貴族」を意味する Adel から派生した人名である。シュトラウス自身の再婚相手の名

前でもあった。そこに絡み合った意図を読み取ることも出来よう。

無邪気な田舎娘を演じるなら
もちろん短いスカートで
いたずらっぽく跳び跳ねる
まるで小リスみたいに！

これで田舎の雀は捉まるの
彼氏が私のあとに付いて来たならば
うぶなフリして「ダメ　あんたって
悪い人ね」と言うの

そこへ真面目な若者が来るならば
にこりと笑って見詰めるの
それも指の間から
いかにもおぼこな感じにね
それから私の前掛けの紐をいじくるの
（右上へ続く）

それから彼氏と草の中に腰をおろし
最後には歌い始めるわ
ラララララ！

アデーレは自分が女優にいかにふさわしい人物かを訴える。この歌に続き、皇妃エリーザベートを想像させる「王女」になった歌、パリの公爵夫人になった歌を披露する。当時の西欧の貴族たちの生態を音の調べを借りて見事に風刺する。所長はなすすべなく気持ちよく落城し、その後園遊会に顔を見せた一同が揃って登場、オルロフスキーはアデーレの才能を認めパトロンになることを約束する。

蜂の一刺し　アイゼンシュタイン降参する

一方アイゼンシュタインは朝6時に刑務所に出頭する。2日酔いの所長がアイゼンシュタインは収監中だと言う。アイゼンシュタインは弁護士に変装して真相を確かめようとする。そこにやって来たロザリンデが夫のことを尋ねる。仮面を脱いだアイゼンシュタインがアルフレートと彼女の仲

を責めるが、ロザリンデから証拠の懐中時計を見せられ、一同の前で恥を掻かされ降参する。

そこへ宴会に出ていた一同が現れ、ファルケ博士がこれは「こうもり博士の復讐」だと芝居の背景を暴露する。昔、自分が宴会で酔いつぶれた時のこと、友人のはずのアイゼンシュタインが自分を見捨てて逃げ出し、皆から「こうもり博士」と嘲笑されたことがあった、この宴会をその復讐の場にしたのだと述べる。アイゼンシュタインは打つ手なし、全面降服となる。

フィナーレ

その後、夫妻のひと悶着があり、最後にロザリンデが「すべてはシャンパンのせいなの」と言って夫を許し夫妻は和解する。そして全員合唱となり、シャンパンこそ第一人者と歌い幕が下りる。まずはロザリンデの歌う「シャンペンのせい」の部分を紹介しよう。

今日の嫌なできごとは　トララララ
みんな　シャンペンのせいなの　ラララ！

でもシャンパンは真実を暴いて
夫の純真な心を
まことに明らかにしてくれ
夫を悔い改めさせました！

さあ　みなさん
一同そろって讃えましょう
あらゆる酒の王様を！

全員の合唱

　みなさんそろって　そろって　そろって

次いでロザリンデが先導し、全員が続く

　王者の威光は　国中どこでも揺るぎなし

　歓声あげてみんなが叫ぶ　シャンパン１世こそ王者！

注釈が必要だろうか。原文を挙げる。

　Die Majestät ist anerkannt rings im Land

　Jubelnd wird Champagner der Erste sie genannt!

「王者の威光」(Majestät)は同時に「陛下」という別意を持ち、皇帝フランツ・ヨーゼフを暗に指す。だが民衆の意識ではそれはシャンペン、「酒の第一人者シャンパン」(Champagner der Erste)となる。皇帝には成れぬ身分ゆえに、地上の権威よりは、せめて人を酔わせ夢を見させる酒シャンペンこそ王者、それをこそ讃えたいとの民衆の心情が顕われるのだ。

あとがき

　オペラやオペレッタでは、仮面舞踏会がよく用いられる。仮面を付け他人になりすまし自分を隠す。なかなか姿を顕さない真実を、虚飾の芝居を演じることによって明るみに出す手法は常套の技法、ヴェルディの「仮面舞踏会」やチャイコフスキーの「スペードの女王」など、また小説ではヘッセの『草原狼』（Der Steppenwolf）に使われ、登場人物の心の深層に潜む欲望を暴き出す。「こうもり」では夫の浮気に一撃報おうとロザリンデがハンガリーの貴婦人に化け、同じく永年の復讐の念に燃えていたファルケともども復讐を果たす。ただし、シュトラウスの寛容なエスプリは、すべてを酒精の働きに帰せしめ傑作喜劇の幕を引かせる。

現実は何も変わりはしない。アデーレがオルロフスキーというパトロンを得たことだけが変化と言えようか。他のひとたちは「どうしようもならぬことは忘れて幸せな」夢を見、再び現実の人生へと回帰する。人生は劇場、帰宅すれば何の変哲もない人生が続く。わたしたちが演劇や映画、歌舞伎や文楽を観た後に、変わらぬ日常生活の戻るのと質的には変わらない。これをカタルシスというアリストテレスの古典的定義に換えることもできよう。「こうもり」を観る愉しさは、庶民の哀感の籠もった気持ちを軽快な音楽の衣で包み、やるせない気持ちを吹き飛ばし、瞬時の陶酔に浸らせるところにあるように思える。

観賞に用いた CD は1980年12月31日のウィーン国立オペラ劇場でのライブを元に作成されたもの。ドイツ語原文は音楽之友社のオペラ対訳ライブラリー『ヨハン・シュトラウスⅡこうもり』（田辺秀樹＝訳2015年発行）を参照した。訳は筆者の改訳です。

指揮はテオドール・グシュルバウアー

演奏はウィーン国立歌劇場合唱団＆管弦楽団。

演出はオットー・シェンク

主たる登場人物：演者

アイゼンシュタイン＝ベルント・ヴァイクル

ロザリンデ＝ルチア・ポップ

フランク＝エーリヒ・クンツ

オルロフスキー＝ブリギッテ・ファスベンダー

アルフレート＝ヨーゼフ・ホプファーヴィーザー

ファルケ＝ワルター・ベリー

ブリント＝アントン・ヴェンドラー

アデーレ＝エディタ・グルベローヴァ

「こうもり」なら、国立劇場版よりむしろフォルクスオペラ版での演出を見た方が一段と面白いかも知れない。さらにウィーン気質についてなら、

彼の最後の作品、オペレッタ「ウィーン気質 Wiener Blut」（1899年）に集大成された彼の音楽の精髄を聴く方がお薦めかも知れない。ただしウィーン方言が自在に使用されるので筆者には解説なくしては理解が難しい。やはり「こうもり」が内容的にはウィーン気質を的確に表現していると言わざるを得ない。